

松葉屋通信



ものの命の行く末がどこにあるのか
知りたくなりました



森の木、河原の石ころ、きれいな漆の器、
おばあちゃんの桐たんす、

こどものときから手放せないぬいぐるみ
それらのものに、命はあるのでしょうか。

大好きなガラスのコップを落として壊れたら、
命はなくなるのでしょうか。

ムクのテーブルと、ベニアや集成されたテーブル。
もとは同じ生きた木でつくられたもの。

命の違いがあるのでしょうか。

子どものころから

「ものを大切にしろ」と

いわれてきたけど

なぜなんだろう。

ものにも命があるのかな。

そんな疑問について、

いろんな人に話を聞きたい。

そう思って、善光寺白蓮坊の住職でもあり画家の

若麻績さんにお話をききました。

「ものの命ってどこで生まれて どこで終わるんだろう。」



善五郎(以下善)…ものの命の行く末ってどうなっていくのかなって思ったきっかけがあって、それは例えば自分の肉親がなくなったことだったりなんですけど。生き物や人間の人生っていうだけじゃなくて、樹齢にして最低でも50年とか100年とか、200年っていう木も扱っているのに、そういう時間の単位で考えた事がなかったんですね。100年と言ったら人間の寿命より長いわけじゃないですか。また山づくり、森づくりは数百年という単位で、僕たちが関わっているところってその中でほんの一部なんですよね。

木を削ったり、切ったり、それで「家具製作しています」では、片手落ちだろうと。更によく、人がものを購入して使い始めた後のこと。あるものは100年とか長い時間つかわれ、あるものは数年で使い捨てられるものもある。その分かれ道ってどこからくるのか。そんなことを考えていくうちにものの命ってなんなんだろうと思いはじめたんです。

これはあくまでも若麻績さんの考え方で正解は無いかもしれないんだけど、聞かせてもらえますでしょうか。

若麻績さん(以下若)…私のスタンスというのはひとつには、坊さんで、もうひとつは絵描きで、その接点で今日は話ができたらいいなと思っています。

宗教的に考えると一神教の世界では超越的な神様がいて、その神様がこの世界をつくられたということになるんです。

その中で、万物の霊長としての人間が、

人間以外の動物とか植物とか大地を管理して統治することを神から命じられている完全にヒエラルキー(※1)の世界が成り立っているわけですね。

一方、日本の神道(※2)では、様々なものに神的なものを認めるところがあるんです。すべてのものに神性を認めるっていう事は日本仏教も同じなんですけど(山川草木悉皆成仏)、我々は近代的な教育を受けて来ているので「人間」と「もの」とか、人間は命があって、ものには命が無くてっていうふうには、完全に線を引く感覚がありますよね。一切のものに命、神性を認めるという宗教感情は、アニミズム(※3)といわれているのはご存じでしょう。

今再評価されているのがこのアニミズムで、一切のものに命があるという考え方は普通に考えると、呼吸もしていないし息もしていないし血液も流れていないし、光合成もしていないし、生き物とは言えないんだけど、そういうところにも命を見えていく。

あるいは、全てが一つの命であるという考え方であって、例えば木を伐ってしまってもそれで終わりではなくて、私たちのすべての命とつながっている、たとえば、木の中にある水素と私の中にある水素はビッグバン(※4)の時に同時に生まれた水素なんだと。こう考えると、境界が消滅していきませぬ。

こどもたちが絵の中の太陽や雲にも顔を描いたりすることは、もともと全てのものに命を見ていくという感覚を持ってい

るんです。それを我々大人は分析して物事を考えるようになってしまふから、全てが生かされていて一体なんだということを忘れてしまった。これはある意味不幸になったといっても良いかもしれないですよ。

善…全てのものに境界線がない、一体のものであるという考えかたから、ものに命があるとして、それを説明するかどうかという事になるでしょうね。

若…人間は死んだらゴミになるっていうことを言った方がいますが、確かに物質として考えた時には死んでしまったらだんだん腐乱して…ということになるけれど、それは一面的な理解になると思うんですね。今は土葬はあまりないかも知れませんが、死体が色々なものに食べられたり、分解してだんだん形をとどめなくなっていくのは、大地に戻るプロセスともいえるんです。チベットでは、鳥葬と言って、死者は鳥に食べてもらうことで天に昇ると考えられています。鳥に食べてもらいやすいように遺体を小さく刻んだりもするそうです。

最初からこの宇宙を大きな一つの命の海として考えれば、自我をもって生きているのは長くても1000年、それ以上生きる人なんてほとんどいないわけですよ。それが終われば自我を捨てて海に戻っていく。だから我々は海の表面に現れる波立ちみたいなので、波が消えたら元の海に戻っていく。

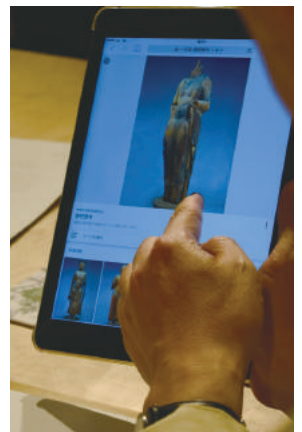
本当に大きな宇宙の歴史から言えばそういったことだと思うんです。

善…木には命はあるんですか？

若…仏像の話をするとか分り易いかと思うんですが、命という物を端的に表現している一木造りという技法の仏像があって、一本の木から造るんだけど、それは平安時代の初期に特に流行ったもので体幹の大抵の部分は一本の木から造るんですね。かなり太い大きな木を使うわけですが、それがもう少し時代が下ると、寄せ木造りが主流になって、もつとずっと大きな仏像も造れるようになるんです。一木造りがなぜ生まれたかというところ、一説には、例えば人々が大切にしてきた御神木が枯れてしまったときに、その木を使って仏像を造ったなんていう事があったと考えられています。

場合によっては、木がねじれたりしていらっしゃるんですね。そうすると仏像もねじれているわけですよ。元の木にあった靈性、神性がそのまま乗り移っているから、ねじれていてもそのものの力があるわけですよ。寄せ木になると、仏像の形を重んじてつくるから、一本一本の木は部材でしかないわけですが、一木造りはもとの木のエネルギーギーがそのまま表出してくるので、たとえ小さい像でもすごく迫力があるんですね。

ちよつと写真を出しますね。これは、成島毘沙門堂の毘沙門天です。この像も一木なんですけど、岩手県にあってこの地方をおさめるための靈力のこもった仏像にするということでも、すごく迫力がありますね。一木造りは神秘的な仏像が多いんですよ。



京都の神護寺の五大虚空蔵菩薩とかね。顔はないんですけどすごく迫力があるって、これは元々の木が持っている生の命の力だと思っただけです。これは奈良時代の仏像です。

私が最初に見てもすごくショックを受けたのは、神護寺の薬師如来で、仏様に病気を治してもらうために凄まじい靈力がこめられているわけですね。

凄まじいですよ。このエネルギーはもとの木の靈力だと思います。

単純に、良い感じとかそういうのを越えて恐ろしいってイメージもあって、神のイメージってただ優しいだけじゃなくて恐ろしさもあるんですよ。

私ね、忘れないのは、木島平のカヤの平に最初に行った時に、35年とか前でですけど森を見ていたらすごく圧倒されて、吸い込まれるような憧れと恐ろしさという相反するイメージがあったんです。普通の植林された森を見ても何も感じないんだけど、それを見てこれは神の原型で、神様ってこれなんだって思ったんですね。日本人は神様を畏怖するって言いますが、神様は慈悲をもたらしてくれると同時に

恐ろしいって感覚があるんです。たまに地震や津波があったりするとその恐ろしさが顕在化するわけです。

究極的にはそれは母なる神であって、自分を生み出してきて、やがてそこへ帰っていくんですね。

善…ものの価値っていうのはどうしても差を付けてしまふ事があるけど、接着剤で貼付けたものと、樹齡が何百年という一枚のものどどうしても違いはあると思うんです。

若…昔の方が、本来持っている命っていう物を理解していてそれをなるべく生かしていかうという方向でものは造られたと思うんですよ。靈力とかを無意識に生かそうとしていた。

それが、次第に単なる部品として使うようになって来たんだと思うんですね。

すごく面白い話があるんですが、善光寺の仁王門の仁王像ですけど、その原型になった小さな像があるんですね。それを芸大に修理に出したら、この像は日本の伝統とは木取りの方法が全然違っていて言われたんです。

まず、寄木っていうのは部材を区切って



造るんだけど、腕なんかは基本的には長手を残して木の方向で取っていくんですけど、この仁王像は小刻みに木を合わせて集成して造っているんだそうで。

善…えー。

若…木材を集成して造っているって、面白いでしょう。これは西洋の作り方なんだそうですね。

それってやっぱり元にあった木の命やエネルギーを生かそうというよりも、部品や素材として使おうとしている感じがありませんね。

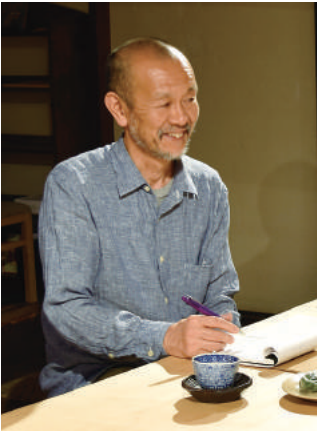
善…そうですね。

若…だからこういったもの(松葉屋のテーブル)はある意味ではとても一木的な作り方なんですよ。

善…つくる人間の意識の問題だけど、ただ部品として一枚板と向き合っていないか。

僕たちや職人が本来木にある力、木の命、靈性を感じて製作に向かっているかどうか。

本当に家具を木の力を生かして製作しているのかっていうのを考えないと。じゃないと意味ないですよ。



若…完全に木取りしてあったものと、一枚板のように元の形が残っているものと明らかに感じ方は違うよね。

佳…明らかに違うんだけど、それを言葉で伝える時にどう言えばいいのかわからないんですよ。

若…それはね、感性なんですよ。

善…それは受け取る人のっていうこと？

若…そう。芸術でも宗教も感性で感じるかどうかっていうので理解が完全に分かちやう。アニミズムって感性の世界で命を感じる人は感じるけれど、感じない人は感じない。自我を確立していくこと

は、自分をどんどん他と峻別して「我思うゆえに我あり」だっていうところまで自分というものを確立していくのだけれど、宗教っていうのは、逆に自我をどんどん解体していく作業だともいえます。

命の全体性を感じられるまで感性を回復するっていう、そのことに気づけた方が幸せなんです。

だからまだアニミズムの世界に住んでいることも私たちの感性ってとっても幸せなんだよね。

松葉屋の家具は、その感性がある人と、そうでない人とは、見たときの感じ方が全く違うんだと思うんです。

善…それは感性が回復することが幸せにつながることであれば、僕たちはそれをお伝えする事が仕事だと思います。

若…その感性を回復するっていう事はとっても大事なことで、私がかやの平で感じた事は、残念ながら植林をした木からはなかなか感じられない。この机を前



にしていると木の命ってすごく感じられていいんだけど、カヤの平に行くとその命を強烈に感じるわけ。

佳…命の強さを感じられるものに、命の重さがあるように思えてしまうけど、命の重さに違いはあるんですか？

若…究極的には違いは無いと思うんですけども我々は自然の一部として生きているから自然のものを見た方が命を強く感じる、人間の造作で造られた自然の方が感じにくいですね。

佳…やっぱり、同じ命んだけど命の持っているエネルギーの違いを感じているっていうことですね。

若…そうですね、命の重さではなくて、エネルギーの質の違いですね。

使う人がそこにいないと生まれないもの

善…デザインとかだと人間の意図することによってあって、想いが入って命になる事ってありますか？

若…ニュアンスが違うかもしれないけれど、木を見るとそれが仏像に見えたとか、神聖なものにフォルムを与えて、その神

聖性を顕在化するっていう事はあると思います。

佳…思いを込めてつくったり、使い続けたものに魂が入るって聞いたことがあります。

若…そうですね。そんな風につくったり使っていくことによって、その命が顕在化するってことも、理屈ではなくてあると思います。

佳…家族がいつもテーブルを触っていて愛着を持って使っているうちに、だんだん命が吹き込まれていくような感じがするんですけど。

使う事でそのエネルギーがものの価値になって、普段使っているものと、そうでないものの違いになっていく。毎日愛しい愛しいと使い続けることで、ものの命のエネルギーが高まって、それを感じられるようになるのかな…と思います。

若…「善光寺は有り難い。ここに来ると帰って来た気がする。」って言われることがあるんですけど、そこにお参りに来られる人がいて、人との関係性や場として、はじめて特別な意味や価値が生まれる事はあると思うんです。

信仰もまたものや場だけで完結するっていう事はなくて、人がそこにいないと完結しないものなんです。

佳…ものの素材の違いで、人の想いを入れたくなるってことはありますよね。

若…そうですね。やっぱりプリントしたものはね、違いますよね。これはコストの問題もあって、ヨーロッパの美術でも大理石の本物を使っている時代と、

大理石の絵を描いている時代があるわけですね。でも本物と偽物という差が歴然としてあって、やはり感じるものは違うと思うんですね。私も絵を描いているとすごくそれを感じるんです。

絵って木を描いたり森を描いたりするけど横から見たらべったんこなわけで、ウソを描いているようなものです。ウソなんだけども、そのウソにいかにも本当のことを語らせるかっていう事があって…。

佳・本物を語れる名画は、たくさんの人々の賞賛のエネルギーを蓄え続けてきたから、高いエネルギーを発していて、よりいっそう感動するんでしょうね。

善・ものの命ってなくなることはあるんですか？

若・ものの命ということには、いろいろな次元があると思います。仏教では、先ほどからお話しているように、ひとつひとつのものは独立しているという、一つ一つの命を峻別する考え方と、否、もろはみんな関係性で繋がっているのだから、絶対的には分けることはできないんだってという考え方があります。たとえば、私という存在も、確かに私という自我を持って数十年間この地球上に生きていられるわけだけど、実は、私という個として生存することは不可能です。呼吸をして酸素を取り入れなければならぬし、食べ物も取らなければならぬし、太陽の光も浴びなければならぬ。食べ物も基本的には他の生きものの命ですよね。酸素を取り入れなければほんの数分で、食べ物を食べなければほんの数日で私は生存

が危うくなる。私という存在は、様々な繋がりの中において生かされていたというものであって、個としての生存は不可能です。私の中には様々な微生物が膨大な数存在していて、その微生物もまた私という存在が生きているのを助けています。私という存在は、細胞レベルでは常に新陳代謝して、どんどん古い細胞が死んで、新しい細胞が生まれています。その細胞の中に存在する水素は、先ほど言ったように、ビッグバンの時に生まれたもので、それが138億年という長い編歴を経て、今は私の中で私を生かさせているんです。こう考えてくると、私という存在の命も、ある次元において私として存在が可能なのであって、ミクロ（※）の、あるいはマクロの視点から見れば全くちがう命の実体が見えてきます。先ほどもお話しましたが、マクロ的に考えれば、宇宙はひとつの大きな命だと言ったことが言えますよね。そうすると、全てはつながっている命だから、死なないっていう事になります。だから、もし私たちが個としての死を迎えてもそれは次元を超えた永遠の命に帰って行っただけということが言えると思います。

こうして私たちが個として生きているという実感をもっていることは大切なことですが、個として生きながらも、もっと大きな命に生かされていたかという視点を決して忘れてはいけないう事があります。そして、今こうして生まれた事も有り難いご縁であって、日々、様々なご縁で生かされているということ、一期

一会のご縁のなかで、様々な人や出来事に会おうという事はやっぱり有り難い事なんですよね。

大いなる命の中で生かさせていただくという実感と、瞬間瞬間に、個として、有り難いご縁をいただき生きているという実感を両方感じる事ってとても大事なことだと思っんです。

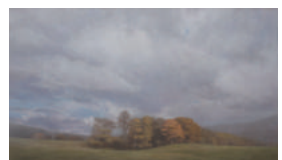
確か、ユング（※）は、まず、人がこの世界が存在すると言う事を認識したのがすごいことだと言っていました。私たちがこの世界や宇宙を認識する起点はあくまで私という存在です。そこから命について様々なことを思い巡らせ、個という殻をうちやぶって、もっと大いなる命に気が付いていく。そこから逆に私たちが今こうやって個として生きているということの意味も分かってくるのではないかと思います。



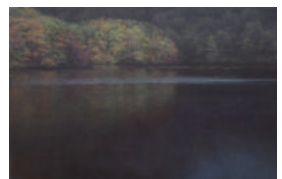
若麻績 敏隆 (わかおみ としたか) 略歴

- 昭和33年 長野市に生まれる
- 昭和57年 東京藝術大学美術学部絵画科日本画専攻卒業
- 昭和59年 同大学院美術研究科日本画専攻修士課程修了
- 昭和62年 大正大学大学院仏教学コース修士課程修了
- 平成6年 善光寺白蓮坊住職に晋山
- 平成24年 善光寺寺務総長(平成26年まで)
- 現在 善光寺白蓮坊住職

日本橋三越本店、大丸東京店、松葉屋、ガレリア表参道などでパステル画による個展開催。



《草原の風》 パステル



《秋翳》 パステル

金継きんつぎ

総まとめ

私たちは生きた木を伐り「もの」をつくり出す。
そんな中で生まれたひとつのテーマが
「直し、繕い、使う」こと。

以前、松葉屋通信でお伝えした「金継」のことを
ものの命の行く末を見つめる今号で全てをご紹介します。

松葉屋のスタッフそれぞれの直したい、
割れたり欠けてしまった大切な器を持ち寄って
親交のある漆作家「飯塚直人さん」の元へ、
金継を教えてもらいに行きました。
それぞれに、思い出の詰まった器たち。
割れたり欠けてもずっと手もとに置いてあって
「いつかはまた使おう」と大切にしていたものです。
その中には、松葉屋で使っている湯飲み茶碗も。
見事にまっ二つ。

飯塚さんの元へ通ったおよそ5ヶ月の記録です。



麦漆をつくる
(小麦粉と漆を混ぜる)

1週間



前回肉盛りをした欠
けの部分に、まだ凹
みがある場合は重ね
てサビ漆で肉盛りを
行います。

1週間



1週間



肉盛りしたところをサンドペーパーを水につけながらヤスリをかけます。
段差が無くなりなめらかになるまで行います。表面がなめらかになったら、
生漆を塗ります。

※肉盛りが、ガタガタしているところは小刀や彫刻刀で削り取ってから
サンドペーパーをかけるとなめらかになります。

出来上がり!



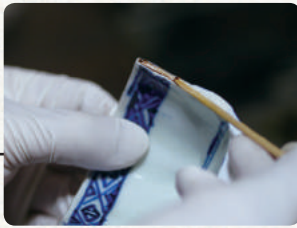
この湯のみは、松葉屋で毎日使用中。
ぜひ会いにきてください。



余分な金を落として、きれい
に洗ったら金継終了です。



漆をしっかりと乾燥させた
後、水洗いをする。



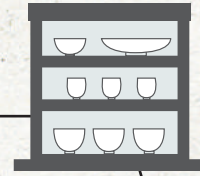
竹箸を使って、麦漆を割れた断面に乗せて伸ばしながら塗る



全ての割れた箇所にも麦漆を塗ったら、破片を合わせる。湿度管理された室に入れて1ヶ月くらい乾燥させる。



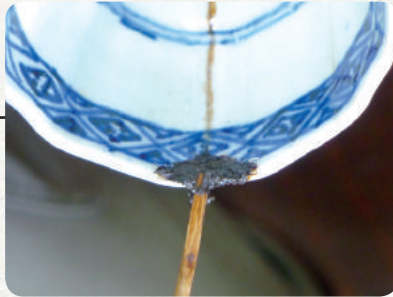
1ヶ月



【室】
湿度 20% 以上
80% 以下の環境に
湿度調整されています。
※漆は空気中の水分と反応して、約
1日半で乾きます。



つなぎ目をさらに丈夫にするために、生漆を細い筆で割れ目に沿って塗る。



サビ漆を欠けている部分に竹串などを使って伸ばしながら塗ります。



サビ漆をつくる
(砥の粉と漆を
混ぜる)



はみ出た漆は小刀やカッター彫刻刀で削り取る。

細い筆で塗っていきませんが、これが仕上がりの線になるため慎重に。



前回漆を塗ったところを表面が曇るぐらい軽くサンドペーパーをかける。



金、もしくは銀の装飾を行うところに漆を塗る。この時、金の場合は「ベンガラ漆(赤色の漆)」銀の場合は「黒漆」を塗ります。



3日~1週間



けし粉をむらなくふりかけて、乗ったら筆で優しくはらう。



漆を全て塗り終わった後半乾きの状態になったら、筆に金のけし粉(金箔を粉にしたもの)をつけ、少しずつ振りかけていきます。漆の乾きがあまいとけし粉が沈んでぶよぶよになってしまい、乾きすぎると粉が乗らないので気をつける。一度振りかけて下地が出て来るようだったら20~30分置いてからもう一度振りかける。



金継ぎを教えていただいた 飯塚直人さん

1976年新潟県生まれ。2004年に渡辺裕之氏(新潟県三条市)、2006年菅原利彦氏に漆を学ぶ。2008年に帰郷し、木工を始める。新潟県上越市在住。

若麻績さんとの話を終えて

3年前の夏、長野市の清掃工場を訪ねました。

単にゴミはどう処理されるのか、という興味だったのですが、その規模、量に圧倒され「この世の終わり」があるなら、こういう景色なのかなと思ったりしたのです。

そこでは、大型の家具を処分される巨大なワニの口のような処理施設もあり、大きな筆筒やテールがバリバリバリと粉砕される様子を目にしました。

「ああ、こうしてまだ使えるのに役割を終え、価値が無くなったものは燃やされ灰になっていく」と思うと不思議な気持ちにさせられました。

一方で直し、繕いを繰り返し、何世代も使われる家具や道具もある。

その違いは何なんだろうと考えるうち「ものに命があるならものの命ってどこで生まれてどこで終わるんだろう」という感情がわいてきたのです。

今回はそんな子どものような疑問を若麻績さんに答えてもらおうというインタビューでした。

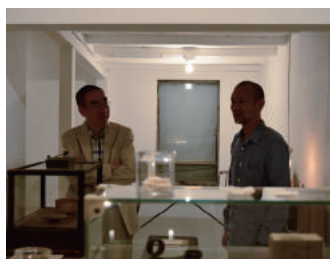
インタビューというには余りに聞き役が力不足でしたが、若麻績さんは3時間近くにわたり話をしてくれました。

自分の中で長く頭に引っかかっていた疑問がベールがはがれるみたいにすっと見えたような気がしたり、また新たなモヤモヤがうまれたり。

答えに手が届きそうで届かない課題なのかもしれません。正解はないものだと思います。

ものの価値や命を考えるきっかけになれば幸いです。

滝澤善五郎



Key Words 若麻績さんのお話に出た少し難しい用語を説明します

- ※1 ヒエラルキー：ピラミッド型の社会的組織や階層制
- ※2 神道：日本固有の多神教の宗教
- ※3 アニミズム：生物、無機物を問わない全てのものの中に靈魂、もしくは霊が宿っているという考え方
- ※4 ビッグバン：宇宙の始めに起こったとされる大爆発
- ※5 トルソ：人体の胴体だけの彫像
- ※6 ミクロ：微小・微視的 ⇄ マクロ：巨視・巨視的
- ※7 ユング：カール・グスタフ・ユング：スイスの精神科医・心理学者、深層心理に着いて研究し、分析心理学を創始した

三省堂辞書・Wikipediaより抜粋

松葉屋通信 VOL.35



発行所：
松葉屋家具店+くらし道具学研究所
〒380-0841 長野市大門町 45

TEL : 026-232-2346

FAX : 026-237-4558

Email : since1833@matubaya-kagu.com

定休日：水曜

発行日 2016年7月16日

香りの贈りもの

行ったことはないのに遠い記憶にあるような、そんな懐かしい香り。
夏のはじまりのころ、松葉屋のとある場所が、この香りとともににはじまりました。

その昔、フィレンツェの修道士が、ローズマリー、ラベンダー、バラの蕾、ジャクシンなど、トスカーナの丘に自生する植物や樹脂をブレンドして、3カ月熟成させて作り上げた伝統のあるポプリ。

店の中をゆっくり歩いていると、どこからかほのかに漂ってきます。
使い続けた古く、美しい道具とともにあるその場所を、
見つけにいらしてください。

松葉屋の idobata (井戸端)。

目を閉じて、香りをたどると、その場所にいけますよ。

